

教皇ピウス9世の生い立ちと 公会議招集までの歩み

青 山 玄

ピウス9世が、その在位年間（1846～78）の初期、教皇領統治の民主化に努め、イタリア統一国民運動の支援者とさえ思われていたのに、1848年11月を境に反動保守の姿勢を固め、中央集権的色彩の濃い第1ヴァチカン公会議を招集して教皇権の確立に努めたことは、わが国にも知られている。¹⁾ しかし、ヨハネ23世が第2ヴァチカン公会議開会の前年、その列福運動を特別に促進した程高德の私生活を送っていたピウス9世が、一体なぜ1848年から近代思想に心を閉ざしたのかという問題について、ピウス9世の側から考究した論文はまだない。糸永寅一師の小論「ピウス9世とその時代背景」²⁾ は、この問題を扱っていると思わせるような題名だが、内容は時代背景の一般的描写と、ピウス9世が1864年12月8日に公布した「現代誤謬表」(Syllabus complectens praecipuos nostrae aetatis errores, 略して「シラプス」とも言う)の紹介だけに終わっている。筆者は、ピウス9世列福運動が話題になった1961年にこの問題に興味をもち、同年11月ピウス9世の生れ故郷セニガリアにまで調査に行き、「ピウス9世の人となりの一側面」と題するイタリア語の小論文を書いたことがあるが、本稿はその時のものを補足して、ピウス9世を内面から動かし導いたものがどのようなものであったかを、新たに模索することを目的とする。

ピウス9世は、それ以前のどの公会議にも見られなかった程、第1ヴァチカン公会議の企画の最初からこれに深く関与した教皇で、教皇庁内の高位聖職者たちがあまり乗り気でなかったのにもよく耐えて、³⁾ こつこつと

執念深く公会議を準備した人である。これに幾分似ている教皇の姿は、第2 ヴァチカン公会議開催前のヨハネ23世の中に見ることができよう。公会議開催を神の御旨と確信したヨハネ23世は、保守勢力からのあらゆる反対と妨害に耐えて準備を進め、その成功のためにジェナッツァーノ (Genazzano, 1959年8月) やロレット (Loreto 1962年9月) などの聖母巡礼地に詣でて、聖母の特別な保護を祈り求めた。そして1962年10月11日、聖母の母性の祝日に公会議を開会した。ピウス9世も、いつ教皇領が奪われるかわからないような不安な国際情勢の中で、真剣に第1 ヴァチカン公会議を準備し、その成功を聖母の保護にゆだねつつ、1869年12月8日無原罪の聖母の祝日に開会している。そして、後年この公会議を回顧して、すべてをかき乱そうとした悪魔の短い時期、すべてを取り違えてしまおうとした人間たちの多少長い時期、最後に、究極の言葉をもってすべてを明確にし、浄化し、すばらしいものに完成してくださる聖霊の時期、という3段階に分けている。⁴⁾ 第1 ヴァチカン公会議の経過をこのように区分すること自体、ピウス9世が通常の人とは異なる特殊な視点に立っていたことを示しているが、それは一体どのようなものであり、どのようにして形成されたのであろうか。ピウス9世がこれについて多く語っていないので、遠くから推察することしかできないが、本稿はそれを、特に教皇の前半生ならびに教皇統治の前半期を調べることによって、試みようとするものである。

1. ピウス9世の生い立ち

ピウス9世は、フランス革命の暗雲がパリから始まってフランス全土を覆いつつあった1792年5月12日(土)から13日にかけての夜に、セニガリアのマスタイ・フェレッティ (Mastai-Ferretti) 家に生れ、ジョヴァンニ・マリア (Giovanni Maria) と名付けられた。セニガリア (Senigallia) は、アドリア海に面した商人町で、ローマの外港アンコーナの北西27キロ程の地点にあり、当時は約1万の人口を擁していた。この町は、13世紀以

来、毎年7月20日から8月8日まで見本市が開かれることで、近隣諸地方に知られていた。1776年7月12日の日付をもつ町役場の記録によると、「このセニガリアの町には36名の高貴な相設役または長老'(consiglieri o siano Senatori) からなる一つの貴族政治的議会 (un Senato Aristocratico) があり、議員のうち3名が2カ月間交替の町長 (Gonfalonieri) となって、町の行政を担当していた。マスタイ家は、16世紀に北イタリアのクレマ (Crema) 市からこの町へ移住して来たが、16世紀末からいつも経続して町長に選ばれており、17世紀にはフェレッティ家の娘との結婚により、伯爵の称号をもつに至った。⁵⁾ しかし、その後も代々町長の一人に選ばれていることから察すると、伯爵の称号を得ても町民から遊離することなく、有力者の相互協力を根幹とするこの町の伝統を尊重して、自分と意見の異なる人の声にも耳を傾ける心の広い統率者精神が、マスタイ家の中に生きていたのではなかろうか。

後年教皇となるジョヴァンニ・マスタイの父ジロラモ (1753~1833) も、そのような高潔な精神の持ち主で、セニガリア町長を7期も勤めており、母カタリーナ (1750~1842) は、非常に信心深い貴婦人であった。二人の間には、長男ガブリエル (1781~1869)、次男ジュゼッペ (1782~1858)、三男ガエターノ (1783~1872)、長女マリア・ヴィルジニア (1784~修道女)、次女マリア・テレサ (1786~結婚)、三女マリア・イサベッラ (1787~結婚)、四女マリア・テクラ (1788~結婚)、五女ヴィルジニア・マルゲリータ (1790~結婚、しかし間もなく子なしに死去)、三男ジョヴァンニ・マリア (1792~1878、教皇) という9人の子どもが生れた。ジョヴァンニの一人の叔父アンドレア (1822没) は、セニガリアの司教座聖堂参事会員で、ジョヴァンニに洗礼を受けた司祭であり、後でペサロ教区 (セニガリアの北西約30キロ付近) の司教となった。もう一人の叔父パオリーノ (1820没) は、晩年ローマのモンテ・チトーリオ高等法院に勤務して、法務課長となっている。⁶⁾

ところで、ジョヴァンニの8人の兄弟のうち、年令的にジョヴァンニに

近い者5人がすべて女性であり、しかも母が42歳になってから生れた末っ子であったことは、注目に値する。田舎町セニガリアの中心部にある伯爵町長の邸宅に住んでいたのでは、近隣の人々や子どもたちからも敬愛の目をもって眺められたであろうし、家にあっても信心深い老母と女きょうだいに囲まれていたのでは、幼児は他者との激しい対立や競争を体験せずに育つからである。おそらくジョヴァンニは、このような社会環境・家庭環境の中ですべての人から愛されて育ち、周囲の人々の気持を鋭敏に感じとり、それに自分を合わせてその期待に応えようと努め勝ちな、感受性の強い少年になったのではなからうか。こういう少年は、自分の権利を主張したり理屈をこねたりするよりも、むしろ相手との一体感を大切にする献身的人間に成長し易いが、ジョヴァンニの場合はどうだったであろうか。

最初の基礎教育は、伯爵夫人である母によって施され、次いで彼女を助ける一人の信心深い司祭も、マスタイ家の邸宅でジョヴァンニの教育に従事した。この邸宅は現在ピウス9世記念館となっており、ジョヴァンニの父母兄弟各人の肖像画も飾ってあるが、母カタリーナは、美顔に慎しみと微笑をたたえ、注意の細かく行き届きそうな貴婦人の姿で描かれている。このような敬けんな教育者により家庭で教育されたのでは、ジョヴァンニが神と人々のためにすべてを捧げて尽力しようとする利他主義的人間になったのも当然であろう。1798年2月20日、80歳の老教皇ピウス6世がフランス軍の捕虜とされたが、その知らせを聞いた母は、家族共同の朝夕の祈りに教皇のため主祷文と天使祝詞の祈りを1回ずつ加え、この逮捕が老衰した教皇にとってどれ程苦しいものであるかについて、子どもたちに語った。すると満5歳9カ月のジョヴァンニが、神はどうして悪いことをしていない教皇をそんな目にあわせるのか、とたずねた。母は、キリストの代理人として迫害されることにより教皇が一層キリストに似たものとなること、こうして神の力が教会の中に一層はっきりと現われること、などについて説明した。しかし、ジョヴァンニは続けて、悪いフランス人が天罰を受けるように祈らなければならないのでは……、と質問した。母はこれに

対しても、十字架上のキリストがその敵どもをお赦しになったように、私たちは教皇を迫害する人々のために、神からの赦しと照らしとを祈り求めなければならないと教えたが、幼いジョヴァンニの受けた仕付けがどのようなものであったかは、こういう日常会話の中にもうかがわれる。⁷⁾

1799年6月9日、ジョヴァンニは堅信の秘跡を受け、1802年2月2日、満9歳8カ月余で初聖体を許された。当時の一般の慣習からすると、この初聖体許可は少し早いと思われるが、ジョヴァンニが普通の子ども以上に信心に熱心であった一つの証拠であろう。1803年10月20日、彼は11歳でトスカナ州ヴォルテッラにあるピエ会員 (Scolopi) 経営の貴族学院 (Collegio dei Nobili) に入学した。そして間もなく数学、音楽、絵画に最高点を取得し、最も優秀な生徒の一人に数えられた。彼はここで、仕事や勉強に対する疲れを知らない程の熱心、自由時間の多くを祈りの中に過ごす信心深さ、小使い銭を節約して貧者に与える無欲と慈悲心に秀で、教師や級友に対する愛と忠実、自分の利己心に対する抑制力と困難苦痛を辛抱する忍耐力においても輝いていたが、これらのすべては、それまで受けて来た家庭教育の成果であった。幾らか色白で明るい彼の顔は、人に好感を与える柔和な表情を宿していて、彼は、教師や級友の誰からも愛されていた。1808年2月にフランス軍が再び中部イタリアを占領すると、一流名門校であったヴォルテッラ貴族学院にもフランス人視察官が来院したが、ジョヴァンニ・マスタイの振舞や返事の適確なのに感心し、「もし環境に少し恵まれるなら、この青年は大いに出世するでしょう」と叫んだという。⁸⁾ またナポレオンの妹でエトルーリア女王となったエリーザ・バッチオッキがこの学院を訪問した時も、その歓待役を務めたジョヴァンニに新たなほめ言葉を賜った。⁹⁾

しかしこの直後ごろから、すでに17歳に達したジョヴァンニは、癲癇 (てんかん) 質の神経過敏症に悩み始めた。それが具体的にどのような症状であったのか、またその原因が何であったかについては、残念ながら殆ど何も書き残されていない。しかしながら、激動する現代日本でも、伝統

的な厳しい仕付けの中に育った優等生が、高校時代のころに時として過激な思想や行動に走ることから察すると、ジョヴァンニが内因性の深刻な不安に悩んだ少なくとも一つの原因は、これまで自分の育って来た環境と、社会の新しい革命的思想や政治活動との間の、あまりにも大きな質の相違にあったと考えてもよいであろう。今までのジョヴァンニは、両親兄妹の深い愛に支えられながら、人からの反対も隣人との対立も殆ど体験せずに模範生の生活を営んで来た。ヴォルテッラ貴族学院でも、おそらくセニガリアで仕付けられた時と同じような価値体系が通用していたであろうから、10歳代前半の多感なジョヴァンニもその貴族的環境に融け込むのに殆ど困難を感じなかったであろう。しかし、ピウス7世が1809年7月6日にフランス軍に逮捕され、フランスへ連行されたころからは、ナポレオン支配下の一般社会が、伝統的権威の無視と過激な民主主義へと急速に変貌し始め、従来貴族の間で重んじられて来た。価値体系を平気で踏みじめるようになって来た。ジョヴァンニの繊細な心は、この全く異質な時流への転換に大きな困難を感じたのではなかろうか。

彼はこのころ、軍人となって祖国に尽したらよいか、それとも聖職者となって教会のために働いたらよいかに迷ったが、人文課程を終えた1809年9月、ヴォルテッラのインコントリ司教から守門と下級叙品の聖位を受け、聖職への道に進んだ。そして同年10月からはローマのクリナーレ丘上にある叔父パオリノの家を寄せて、ローマ学院に通学し、哲学と高等数学と物理学を履修した。しかし翌年の秋、ローマ学院がフランス軍によって閉鎖されると、ペサロの司教である叔父アンドレアのもとへ移ったが、この叔父も、ナポレオンの命ずる宣誓を拒んだために、間もなく北イタリアのマントゥアに投獄された。1811年、19歳となったジョヴァンニは、ミラノの近衛師団へ召集されたが、セニガリア地方を治めている知事の取り次ぎにより、「癩癩病のため」という理由で多額の金を納入し、兵役を免除してもらった。¹⁰⁾

ジョヴァンニは、その後失意の中に自宅で過していたが、1814年5月、

フランスでの捕囚から解放されてローマへ戻る教皇ピウス7世がセニガリアを通過すると、拜謁を許され、教皇に伴ってローマへ上った。そして再びローマ学院で、グラツィオーズィ神父指導の下に神学の研究を始めた。しかし何を思っただか、翌1815年に教皇親衛貴族隊 (guardia nobile) が募集されると志願して入隊した。でも、間もなく癲癇発作のため除隊させられた彼は、自分の将来が全く崩れてしまったかのように感じて教皇の足下に身を投げ、涙を流して泣いた。しかし、教皇から、神の慈しみに信頼し聖母の取り次ぎを願うようにと励まされて立ち上ると、やがて、1815年2月26日から3月12日まで、聖ヨハネ聖パウロ教会の側に建つ御受難会修道院での四旬節黙想会に参加した。信心深い人でも1週間しか参加しない黙想会に、2週間も続けて参加したのは、心の悩みが深刻であったからであろう。

彼がこの黙想会中に書き留めた数多くの決心¹¹⁾から察すると、外界に向ってはっきりと自己主張できる程の強い自我がなく、ただ献身的奉仕にしか生きがいを見出せない彼の心は、自分を内面から理解し、支え、権威をもって導いてくれる者を、真剣に渴望していたのではなからうか。しかし、自分が個人的面識をもつ穏健進歩派の教皇ピウス7世を警護することに生きがいを見出したい、と思って入隊した教皇親衛貴族隊にも満足できなかったのは、そこに民衆の声を無視する冷たい反動保守の精神が根を張っていたからであろう。一方では、保守勢力に対する憎みで硬化している過激派自由主義者たちとその声に耳を傾けている民衆がおり、他方では、古いものを守り抜こうとしますます高圧的になっている保守勢力がある。教皇領北部の田舎町出身者としてウィーン会議後の保守反動政治に不満をもつ民衆にも同情心があり、貴族学院出身者としてナポレオン支配下に甚大な損害を受けた貴族層の怒りと不安にも共感している自分は、この両対立勢力のうちどちら側の味方となって生きてらよいか。……おそらく若いジョヴァンニの心を一番悩ましていた問題は、このような先鋭化した保革対立にあったのではなからうか。

黙想会によって、自分の心の中に神と聖母に対する内的一体感を呼びおこし、新たに神と聖母への奉仕に生きようとして立ち上ったジョヴァンニは、その後も1818年ごろまではまだ時々内的不安に悩まされたが、毎日の祈りと毎年1回の黙想会などにより次第にその不安を超越して、神学の勉強を続けることができた。ローマ学院の神学教授グラツィオーズィ神父は、このころのジョヴァンニについて、「マスタイは博学で、めずらしい程徳高い青年である。彼の胸には教皇の心が脈打っている」という、予言的な言葉を残している。¹²⁾

2. 司祭・司教時代のピウス9世

1819年4月10日の聖土曜日に司祭に叙階されたマスタイ神父は、もう癩癩発作を起さなくなっていたが、しかし彼の病気に対する配慮からか、最初の任地はタタ・ジェヴァンニ育児院であった。これは、ローマのサン・パウロ門から北東へ800メートル程進んだ城壁の外側にあり、彼の務めは、育児院の靈的指導と収容児童に対する幾何と図画の教授、ならびに児童の遊びと散歩の時の世話であった。普通に考えるなら、この小さな育児院での仕事は、神学生時代の優等生にとって少し物足りなく感じられたであろう。しかし彼は、これらの平凡な仕事を細かい所までよく心をこめてなし、間もなく職員からも子どもたちからも、感謝され慕われるようになっている。とすると、彼の心には、自分の最初の教育者であった母の面影が深く焼き付いていて、それが、聖母信心に特別な喜びを見出させたばかりでなく、母のようになって子どもの世話をするこの小さな育児院での仕事にも、大きな喜びを感じさせていたのではなかろうか。彼は、ここに任命されてからも、フランシスコ会修道院や御受難会修道院でなす、毎年の黙想会を続けていた。

1823年6月、教皇ピウス7世は、イスパニア本国からの独立運動が発生している不穏な南米チリーへ派遣する教皇使節ムーツィの法務官として、突然マスタイ神父を任命した。独立運動の指導者たちと教皇庁との外交関

係を樹立しようとするこの進歩的試みには、当然イスパニア本国側からの強い反対も予想されるので、使節はなるべく保守勢力を刺戟しないようにして巧みに進歩勢力に近付かなければならない。綱渡りのように難しいこの外交折衝の脇役に、教皇はマスタイ神父を適任と考えたようである。しかし、神父の母カタリーナは非常に心配し、神父がこのような大任から免除されるようにと、早速國務聖省長官のコンサルヴィ枢機卿に嘆願書を送った。この嘆願書の中には、次のような言葉が読まれる。

「この子は、ローマや祖国や自分の家族などに自分を適合させ、ただ神の摂理にたよって何とか生き残っていますが、(中略)結局この子は、その虚弱な体質のために、長年来兵役などのすべてから合法的に免除されて来ました。どうしてでしょう。献身的でいつも節食していますが、生れつき虚弱で、理解されないとすぐ立腹し、ひどく苦しむのです。」¹³⁾

母のこれらの言葉は、何よりも 1812,3 年ごろのジョヴァンニについての観察に基づくものと思われるが、教皇は、「マスタイ神父は健康になって帰って来るでしょう」と答え、その任命を変更しなかった。事実、マスタイ神父は、航海中の大嵐にも、ブエノス・アイレスでのイスパニア官憲からの冷遇にも、南米諸地方への苦勞の多い旅の連続にもよく堪えて、立派に所期の目的を達成し、1825年7月6日にローマへ帰って来たのである。¹⁴⁾

ピウス7世は、マスタイ神父が南米へ出発して1カ月と経たないうちに逝去したので、帰国した時の教皇はレオ12世(1823~29在位)であったが、この保守派の教皇もマスタイ神父を深く愛し、まずヴィア・ラータ (Via Lata) の聖堂参事会員兼高位聖職者 (praelatus) となし、聖ミカエル大育児院の指導を委託した。33歳のマスタイ神父は、間もなくこの育児院の組織や経営方法を根本から改革して大いに発展させた。教皇はこの成功を喜び、1827年5月21日、マスタイ神父を今度は自分の故郷スポレトの大司教に任命した。この大司教区では、彼の前任者アンカニーニ大司教の時に一般信徒の道義心が著しく低下して、聖職者の規律も乱れていたが、マスタイ大司教は、民衆や配下の聖職者と話し合っって各種の改革を断行し、

教区民をたちまち昔の熱心へ呼び戻すことに成功した。¹⁵⁾

1831年2月3日、前年フランスで成功した7月革命の影響を受けたカルボナリー秘密結社員が教皇領北部のモデナ市（ボローニャ市の西39キロ）で反乱を起した。反乱はすぐにボローニャ市に、更に全ローマニャ州に広まり、マルケ州、ウンブリア州にまでも飛び火した。2月2日に登位したばかりの新教皇グレゴリウス16世（1831～46在位）は非常にあわてたが、セルコニャーニの指揮する反乱軍の一部がスポレト市に近付いた時、マスタイ大司教は徒歩で山を越え、レオニッサのカプチン会修道院へ避難した。しかし同年3月、オーストリア正規軍が教皇からの依頼で武力干渉に乗り出すと、革命軍は敗れてアドリア海沿岸地方に追い込まれた。教皇は、人命尊重のため、マスタイ大司教を特命使節として革命軍へ派遣することにした。大司教がスポレト市に帰ると、市民はすでに彼を民衆の味方として歓迎したが、アンコーナに立てこもる革命軍も、彼の誠意ある説得に服し、約4千の銃と5門の大砲を差し出して投降した。民衆は、大赦の約束を条件にして3月26日に結ばれたこの降伏協定を喜び、家ごとの窓に灯火をともして祝ったという。しかし、オーストリア政府からの圧力でこの約束は破棄され、教皇領内では突然、反乱関係者に対する徹底的探索処刑が始まった。¹⁶⁾ 教皇の権威と信用に泥を塗るこの圧力のゆえに、マスタイ大司教がオーストリア政府を非常に不快に思うようになったのも、当然である。大司教にも罪ある者たちの分厚い名簿が警察から渡されたが、彼はそれをすぐ火に投げ入れ、

「おまわりさん、あなたはあなたの職務のことも、わたしの職務のこともよく知っていませんね。狼が羊を奪おうとしている時、そのことをまず羊飼いに知らせはしませんよ」¹⁷⁾

と答えたと言う。彼が、警察から搜索されて逃げ場を失ったルイ・ナポレオン（後のナポレオン3世）とその母ホルテンジアをかくまい、神父をつけてスイスへ逃してやったのは、この少し後のことであった。

ただ外的な行為だけから判断するなら、マスタイ大司教は、このころに自由主義の支援者になったかのような印象を与えるかも知れない。しかし、彼が実際に自由主義を支持した形跡はどこにもない。従って、彼は教区民全体に対する牧者的愛のために、自分と意見を異にする自由主義者たちの人格と祖国愛を尊重し、その人たちが母なる教会を通して神に立ち帰る道を、絶えず開けておこうと努めていたのではなからうか。実際のこのころのマスタイ大司教は、民衆の心の奥底にひそむ善意に対して暖かい理解と明るい希望をいだいており、彼の接していた民衆もまた、その期待によく応えていた。1832年、スポレット市が大地震に襲われて罹災者が続出した時、彼は最後の小使い銭までも差し出して教区民の救助に努めたが、救援を懇願する彼の真剣な訴えに、教皇グレゴリウス16世も感動の涙を流したという。このころのマスタイ大司教は、それ程までに民衆と苦楽を共にする情熱的な牧者だったからである。¹⁸⁾

1832年2月16日の枢機卿会（consistorium）で、マスタイ大司教は、ローマニャ州イモラ市の司教に転任された。大司教区から司教区への転任は、形の上では格下げであるが、実際上は、山の中の古い大司教区から、もっと人口が多くて重要視されている平地の司教区への栄転であった。教皇領の北端にあって広大な平野に恵まれているローマニャ州には、教皇庁の支配に敵意をいだく過激な自由主義者も多く、教皇レオ12世の晩年には、3カ月に308名もの政治犯が処刑された程であった。¹⁹⁾しかし、その後も政治犯の数は減らず、牢獄はいつも政治犯であふれていた。マスタイ新司教は、教皇庁のこのような苛酷な処置に対する民衆の反感から、低迷状態に落ち込んでいたイモラ教区に着任すると間もなく、16世紀後半のカロロ・ボロメオ司教か、17世紀初頭のフランソワ・ドゥ・サール司教にも比べられる程のめざましい活動を開始した。すなわち、各地の教区民を訪問してその声に耳を傾け、数多くの説教・集会・要理教育によって彼らの信仰心を燃え上らせたばかりでなく、神学校教育を充実させたり、良書の出版普及に尽力したり、神学上の諸問題に答えるために学術的な聖書研究会

(*accademia biblica*) を設立したりもした。また7名の神父と数名のヴァンセンチオ会修道女に命じて棄て児を集めさせ、乳児院を創設したり、貧民救済のためにその必要に応じて借し倉庫、病院等を設置したりした。²⁰⁾

政治犯や反乱共謀者に対しては、スポレット大司教であった時よりも大きな理解を示し、幾度も獄中の彼らを訪問し、警官や看守には、彼らに対して最大の寛大さを実践するよう願ったり警告したりしていた。反乱共謀者のリポッティがこの好意を悪用して、マスタイ司教と二人の枢機卿とを自分の家に招待し、暴徒を呼んで人質にしようとしたこともあったが、客が予定よりも早く帰宅してしまったために失敗に終わった。しかし、このことを後で知っても、マスタイ司教の過激な自由主義者に対する母のような愛と寛大さは変らなかった。²¹⁾ 司教はまた、穏和革新派のジョベルティ神父 (*Vincenzo Gioberti*, 1801~52)、バルボ (*Cesare Balbo*, 1789~1853)、ダズェーリョ (*Massimo T. M. d'Azeglio*, 1798~1866) 侯爵らの論文や著書を好んで読み、イタリア統一のためのその理念に感動してもいた。それで保守派の人々からは、「自由主義的司教 (*vescovo liberale*)」とか、「マスタイの家では猫までリベラルだ」などと悪口も言われたが、司教は少しも意に介さなかった。

彼がこのようにして、最も難しいと思われていた教区の刷新と復興に成功したことは、ついに教皇庁内の保守勢力の心までも動かし、1840年12月14日、教皇は彼に枢機卿の高位を授与した。しかし枢機卿になっても、マスタイ司教に対する一部保守勢力の抵抗は続いていた。1846年5月、彼が保守派のイモラ市長に、市長の新しく生れた赤子の代父になりたいと申し出ると、市長から、「何ですって。自由主義者が私の子の代父ですって。いいえ、決して、決して」と強く拒絶された。その1カ月後、教皇に選ばれたピウス9世が同じ市長あてに、「あなたは、イモラ司教があなたのお子さんの代父になるのを拒絶なさいましたが、ローマの司教は受け入れてくださるでしょうか」と電報を打つと、市長はローマへとんで来て新教皇

の足下に平伏し、提供された榮譽に厚く感謝したという。²²⁾ 単に進歩主義者・自由主義者に近付こうと努めただけでなく、保守主義者の心をもこのようにして巧みに獲得して行ったことが、マスタイ司教を成功へ導いたのではなかろうか。

3. 1848年11月までの教皇ピウス9世

進歩主義者・自由主義者に対する弾圧をもって統治を始め、鉄道の敷設やガス灯の導入までも、革命精神を養う虞れがあるとして許さなかった保守反動政治を、16年間も鉄の意志で貫いて来たグレゴリウス16世が1846年6月1日に逝去すると、イタリアの民衆は、一斉に進歩的教皇の登位を強く希望した。それで、進歩的枢機卿として知られているマスタイ司教が、ローマへ教皇選挙に行く途中、ウルビーノ市に近いフォッソブローネ町を通りがかったら、民衆はその馬車の上に一羽の鳩がとまっていつまでも離れないのを見て、「教皇様ばんざい。ほら、鳩の教皇様だよ」などと叫んだという。²³⁾

この時点での枢機卿数は62名で、その内訳は、イタリア人55名（教皇庁勤務30名、ローマ以外の教皇領内在住17名、他のイタリア諸都市在佐8名）、フランス人3名、オーストリア人、ベルギー人、イスパニア人、ポルトガル人各1名であった。イタリア人が圧倒的多数を占めているので、教皇選挙は外国人枢機卿のローマ到着を待たずに6月15日に始まったが、選挙に参集した枢機卿は52名だけであった。新教皇への有力候補者としては、以前に国務聖省長官を務めたことがあって教皇庁内に支持者の多いベルネッティ枢機卿と、オーストリア政府からの支持を受け、長年国務聖省長官として保守反動政治を強引に推し進めて来たランブルスキー枢機卿が挙げられるが、前者に対しては保守勢力の唯一の軍事的保護者であるオーストリア政府からの反対が強く、後者に対しては民衆の反対が強くて、保守勢力は混迷状態にあった。そのため、この際この二人以外の穏和な進歩派教皇が立たないなら、教皇領は立ち行かないと恐れる枢機卿も少

なくなかった。一方、ローマの民衆が教皇登位を強く希望しているのは、ローマの南西150キロ程の田舎町チェッカーノ出身者で、1844年以来ダツェーリョら穏和革新派の主張に共鳴する発言を繰り返し、オーストリア軍のイタリア進駐に反対しているジッズィ (Gizzi) 枢機卿であった。しかし、この野心的発言をなす枢機卿に対しては、危急の時教皇領の保護者となるはずのオーストリア政府からの反対が強い上に、枢機卿団の中でも支持者が少なかった。マスタイ枢機卿は、教皇領北部の諸地方ではよく知られていたが、ローマではただ義務感の強い人、だれにでも親切で温厚な人と考えられていたに過ぎなかったようで、いわば進歩的であって、しかも保守派からの風当りの少ない枢機卿であった。²⁴⁾ 6月15日午前の第1回投票の結果、ランブルスキーニ枢機卿が15票、マスタイ枢機卿が13票、ファルコニエーリ枢機卿が5票を獲得し、その他の票の多くは、中間派のあまり有力でない候補者に幅広く分散した。マスタイ枢機卿は、同日午後の第2回投票に17票を取得して、ランブルスキーニ枢機卿の13票を追い越し、16日午後の第4回投票には、ついに36票を獲得して当選した。

新教皇は、苦悩のどん底にあった時の自分を励まし導いてくれたピウス7世に対する感謝の気持からピウス9世と名乗り、国務聖省長官には、民衆の間に支持者の多いジッズィ枢機卿(1787~1849)を任命した。また若い進歩派のコルボーリ・ブッスィ神父や、ラムネーの有能な弟子ヴェントゥーラ神父や、自分の神学教授であった老グラツィオーズィ神父らを自分の顧問に選んだが、民衆は教皇庁の流れが大きく変り始めたのを喜び、事あるごとに“Viva Pio”(ピウスばんざい)の叫びを熱狂的に繰り返して、革新ムードを盛り上げた。教皇もまた、すべての人に教皇謁見を許したり、多くの慈善事業を設立したり、行政機構近代化のため6人の枢機卿から成る協議会を発足させたりして、よく民衆の期待に応えた。6月21日の教皇戴冠式からまだ1カ月と経たない7月17日には、極度に寛大な大赦令を公布して、数百名の政治犯を「臣下としての義務の忠実履行」という条件の下に釈放し、8月には鉄道敷設やガス灯工事のための委員会も発足さ

せた。²⁵⁾

しかし、このようにして画期的な活動を展開させながらも、教皇は心中一つの不安を感じていたようで、同年11月8日(日)、教皇領の支配権を象徴するラテラン宮殿の鍵を受け取る街頭行進と儀式とを盛大に挙行した直後、回勅“*Qui pluribus*”を9日付で公布して、自由主義の根本原則に対する批判的態度を明示した。²⁶⁾それによると、彼はこの至難な時代に対処する自分の弱さを深く自覚しつつ、また最も大きな不安に苦しみつつ、教皇の位に登ったのだと述懐し、全世界のすべての司教が十分に警戒して自分に託された群を守り、人類の敵に対して毅然として戦うようにと願っている。また、特に宗教と社会を根本から動揺させ破壊するさまざまな誤った思想が、神の啓示や教会とローマ聖座の権威を攻撃していることに人々の注意を喚起し、その誤った思想の例として、当時の聖書研究、宗教無関心論、共産主義、聖職者独身性廃止論などを挙げ、学校教育の歪曲や出版物の無軌道ぶりについても嘆いている。そしてこれらの危険思想から教会とカトリック信仰を守るため、特に「生きている不可謬の権威」をキリストから受け継いでいる。ローマ聖座との一致に心がけること、司牧活動と説教と祈りを心をこめてなすこと、こうして身をもって信徒によい模範を示すこと、よい神学校教育や、黙想会ならびに教会から許されている巡礼の奨励に努めること、汚れない聖母の取り次ぎを願うことなどを強く勧めている。この回勅は、このころの教皇の明るい活気にあふれた活動とは対称的に異なると思われる程、全体として近代社会に対する否定的評価と危機意識に満ちているが、ピウス9世の中には、この二つの相異なる姿勢が初めから共存し、相互に刺戟し合っていたのかも知れない。冒頭に述懐している不安も、教皇が実際に心の奥底にいただき、苦しんでいたものであろう。ピウス9世は、1830年11月に聖母がパリのヴィンセンチオ会修道女カトゥリーヌ・ラブーレ(*Catherine Labouré*, 1806~76)に出現なされたことを信じ、その聖母の助けを受けるため、多忙な日課にロザリオの祈りの時間を設けて、聖母信心に励んでいるからである。ことによると教皇

は、この 1846 年の 9 月 19 日（土）にフランスのグレノーブル教区ラ・サレットで、メラニー（*Mélanie Mathieu*, 1831~1904）とマクシマン（*Maximin Giraud*, 1835~75）という二人の子どもに聖母が出現し、近代世界の宗教的実態について悲観的に語って、神ならびに教会の権威に対する従順を強調したこと、ならびに聖母の取り次ぎを願うよう勧めたことも、すでに耳にしていたのではなかろうか。

しかし、近代世界に対する教皇のこのような不安は、イタリアの統一と近代化という理念に夢中になっていた当時の民衆には、殆ど通じなかったようである。回勅公布の翌日、人々は、教皇が社会の各階級の代表者約 1 千名を招待した宴会に、巨大なピウス 9 世像を持ち込んで“Viva Pio”（ピウスばんざい）を叫び、大きな希望と喜びに酔っていた。²⁷⁾ ローマから遠く離れているドイツやフランスの進歩的思想家たちも、この実行力のある新教皇の下で、カトリック教会は実際に一般民衆の側に立ち、近代社会のキリスト教化に努めるのではないか、という夢を描いたようである。例えばソロボンヌ大学のオザナム教授（*Frédéric Ozanam*, 1813~53）は、ピウス 9 世を「19世紀の最も大きな仕事、すなわち宗教と自由との同盟をなし遂げるために、神の派遣してくださった使者」として称賛している。²⁸⁾ しかし、オベール（*R. Aubert*）教授とリール（*R. Lill*）教授も書いているように、²⁹⁾ これはピウス 9 世の意図を根本から誤解した発言であらう。

確かに、ピウス 9 世は、グレゴリウス 16 世時代の保守反動政治に対してと同様に、北イタリアでのオーストリアの高圧的な政治姿勢にも反感をいっていた。また、教皇になった当初から、オーストリア大使に対しては非常に消極的な態度を堅持していた。しかしそれは、自由主義思想によって新しい世界を造ろうと意図したからではなく、何よりも牧者のない羊のように苦しんでいる民衆に対する暖かい親心と同情心からであり、また過酷な保守反動政治では、まじめで有能な青年たちの心を反抗へと駆り立て、過激思想を盛んにするだけである、と恐れたからであったように思わ

れる。彼が1846年12月に税制を、翌年1月に裁判法を改革したのも、また1847年8月に新しい出版法を公布して5名の検閲官のうち4名を俗人に変更したのも、10月に24名の俗人と1名の枢機卿とから成る教皇庁諮問法院（*Sacra Consulta*）を設置したのも、^{30）} 何よりも1815年のウィーン会議後、保守勢力による一方的な圧政や聖職至上主義（*clericalism*）で痛め付けられた民衆の心の傷をいやし、民衆と為政者との間の信頼関係を樹立すること、そして君主制の教皇政治をもっと民衆に好ましいものとなすことを意図したものではなからうか。これらの改革は、いずれもまだ末端的あるいは補助的であり、しかも教皇自身の発意による上からの手直しに過ぎないからである。

しかし、民衆は教皇の誠意を十分に信じてその改革に積極的に協力し始め、それまで教会から離れていた信徒で教会に立ち戻る者も少なくなかった。それでピウス9世も、この民衆からの強い要望に応え、教皇領統治の近代化を目ざして次第に大きく漕ぎ出すようになり、ついに1847年4月19日、議会政治の導入を約束したり、同年7月、オーストリア進駐軍が教皇領内のフェルラーラ市を占拠したのを契機に、教皇領の自由を守るためという口実で願われた市民軍（*guardia civile*）の創設を認可したりした。^{31）} 幼少の時以来、自分を愛し信じてくれる人のどんな望みにも自分を合せようと努めて来たピウス9世にとり、十分の理由もなしに、自分の味方である人々の願いを拒否することは、難しかったのではなからうか。1847年8月以来、教皇は、教皇領とトスカーナ大公国やピエモンテ・サルデーニャ王国との関税同盟を結ぶ計画を進め、将来は両シチリア王国やモデナ公国などをも参加させて、イタリア同盟を樹立させる考えまでいっていた。同じころ、英国使節ミント公もイタリア諸国を歴訪して、英国がオーストリアの武力干渉を黙過しないことを非公式に伝えると共に、自由主義的な内政改革を勧説した。これを知ったメッテルニヒは、同年12月ついにフェルラーラから撤兵させたが、その直後12月29日付自発教令（*motu proprio*）で教皇の発表した内閣の構成によると、教皇庁の外交をも兼務する國務大

臣は枢機卿であるが、その他の8大臣は俗人になっている。しかし、最後の決定権は教皇一人に保留されている。³²⁾

ピウス9世がこのようにして教皇領統治の近代化に努め、以前に過激思想の持ち主として投獄されていた政治犯をも要職につけたり、その声に耳を傾けて市民軍を創設したりすると、民衆の政治活動にあまりにも身を任せ勝ちな教皇の施政に、不安をいだく人々も少なくなかった。民衆は、過激なチチェルアッキオ (Angelo B. Ciceruacchio) らの指揮の下にすでに1847年3月から“Viva Pio Nono solo” (ピウス9世にだけばんざい) と叫び、この少し後にはイエズス会員や警察を憎む叫び声もまじえて、次第に教皇を独占する動きを示していたからである。以前にはローマの民衆から慕われていたジッヰ枢機卿でさえ、1847年7月の市民軍創設に深刻な不安を感じ、ついに國務聖省長官を辞任した。それで教皇は、自分の従兄弟フェレッティ枢機卿をその後任に任命しなければならなかった。オーストリアの老練な政治家メッテルニヒもピウス9世のこの不足面を鋭く見抜き、

「神は決して大赦を与えない。……神のあわれみは、ただ赦すという道で示されるだけである。その赦しには、痛悔が必要条件として求められている。」³³⁾

など書いている。民衆への愛と同情のため、正義の厳しさも悪に警戒する賢明さも犠牲にしていたピウス9世の弱点を、如実に描き出している言葉である。

慧眼をもつ人々の予測した不幸は、それから1年と経たないうちに、現実となって現われて来た。すなわち、有能なジッヰ枢機卿にも逃げられ、多くの俗人自由主義者たちに囲まれて政務を執っていたピウス9世は、1848年3月15日、新しい憲法を承認し発布したが、こうして組織された新内閣にはレッキ首相を初めとして俗人が大多数を占め、今まで教皇庁諮問法院議長であったアントネリ枢機卿 (Giacomo Antonelli, 1806~76) の國務大臣になっているのが、一寸注目を引くだけである。その直後、ミラノでオーストリアに対する反乱が始まり、ミラノ市民から救援の依頼を

受けたピエモンテ・サルデーニャ王カルロ・アルベルトが、3月24日革命の嵐にあえぐオーストリアに宣戦を布告した。同じ3月24日、ピエモンテの将軍ジョヴァンニ・ドゥランドの指揮する教皇領市民軍も、教皇の承諾なしにローマを出発し、北部国境へと急いだ。教皇は、すぐ将官たちに国境を越えて戦わないようにと命令したが、しかしイタリア独立戦争に情熱を燃やす民衆や政府要人からの圧力に押され、憲法ならびにこれまで自分の語って来た言葉にも束縛されて、次第に悲惨な板挟み状態へと追い込まれて行った。そしてピウス9世のこの弱みを知る教皇領市民軍は、4月21日、ついにポー川を渡って進みオーストリア軍と戦火を交えるに至った。³⁴⁾

単なる世俗の君主と異なり、カトリック者全体の靈的指導者でもある教皇は、罪のないオーストリアに対して自分から積極的に戦争を仕掛けることは容認できない。しかし、自分の味方である人々の心を悲しませ、彼らに敵対したくもない。そこで教皇は、この苦しい気持をイタリア人の祖国愛に対する大きな共感と共に表明する弁明書を作成した。草稿に読まれるこの微妙な苦しい表現は、おそらくアントネッリ枢機卿によって加筆されたのであろうが、参戦拒否の第1点にアクセントを置き、イタリア人の祖国愛に対する暖かい理解という第2点を不明瞭にした訓示の形に書き直されて、4月29日に公表されてしまった。³⁵⁾ ピウス9世はその時、このアクセントの変更がどんなに重大な結果を生み得るかについて、考えても見なかったであろう。しかし、独立戦への参加を熱狂的に要求していた民衆指導者たちは、5月初め、教皇を「誓いを破る祖国の敵 (*spergiuro nemico della patria*)」と呼んで、教皇に対する不信の念を民衆の間に広めた。驚いた教皇は、オーストリア皇帝にイタリアからの撤兵を願う5月2日付書簡を送ると共に、自分の本当の気持を民衆に説明したが、しかし一旦広まった不信感を取り除くことはもうできず、かえってこの弱腰の態度により民衆指導者たちを増長させるだけであった。³⁶⁾

その後、マミアニが教皇から指名されて組閣した内閣も、民衆指導者たちからの執拗な反対に悩まされ、7月25日にピエモンテ・サルデーニャ

軍がクリストーザで大敗した後にはインフレも加わって、民衆の教皇に対する態度は悪化した。同年11月15日、北イタリアからの帰還兵の一群が、新しく首相になったペレグリーノ・ロッシを刺殺すると、市民軍は大砲までも持ち出してクィリナーレ宮殿の教皇に圧力をかけ、翌16日にはスイス人護衛兵を解散させて、市民兵が教皇の身辺を守ることになった。こうしてピウス9世は、ちょうどフランス革命の時のルイ16世のように、過激な自由主義者たちと教皇領市民軍との捕虜のようにされたが、バイエルン公使カール・フォン・シュパウル夫妻、フランス大使ダルクール、自分の忠実な僕フィリップーニらの協力により、11月24日の夜、変装して両シチリア王国の要塞ガエータ（ローマの南東約140キロ）へ逃げることに成功した。この亡命は、何よりもアントネッリ枢機卿からの強い勧めに従ったものであるが、教皇庁内の他の枢機卿たちも、それぞれ皆ガエータに亡命して来た。

生来感受性が強く、人々からの愛と信用を人一倍多く必要としていたと思われるピウス9世が、1848年春以来の革命的自由主義者たちの仕打ちにどれ程苦しんだかは、おそらく常人の想像を絶するであろう。56歳の教皇には、もはや青年期にあったような癲癇発作も起らず、自分の悩みを本当に理解してくれる人が身辺にいなかったため泣くこともなかったであろうが、しかし、後述するように、この時を境にして不可解な程一切の近代思想に心を閉ざしたことを思うと、この隠れた苦悩は余程深刻であったと考えられる。人々から愛され支持されるならば、すぐれた統率力と大胆さと疲れを知らぬ忍耐力を発揮してその期待に応えるピウス9世の心も、味方であった人々から支持されなくなると、急にその魔力を失って弱腰になり、絶望的悲嘆に落ちこむようである。しかし、苦しむ民衆の要望に応じて、自由で豊かな祖国を築こうとした夢が水泡に帰しても、ピウス9世にはもう一つの生きる道が残されていた。それは、民衆とは違う次元で激動の時代の波にもまれ苦しんでおり、自分の助けを必要としている保守的貴族の期待に応じて生きる道である。

4. 1848年11月から公会議招集までの教皇ピウス9世

教皇のいなくなったローマの民衆と国会議員たちは、ピウス9世も1831年のグレゴリウス16世のようにオーストリア軍に救援を依頼し、過激な保守反動政治を始めるのではないかと恐れた。そこで早速神学者・哲学者として知られている伯爵ロスマーニ神父（Antonio Rosmini-Serbatì, 1799～1855）を使節としてガエータに派遣し、教皇との和解を求めた。ロスマーニは、教皇に再びローマに戻って統治を続けて欲しいこと、またもしどうしても亡命を望まれるなら、ピエモンテ・サルデーニャ国王の下に行った方がよいことなどを種々の理由をあげて説明した。しかし、教皇はアントネッリ枢機卿を通じてロスマーニのすべての申し出を拒否し、非妥協の姿勢を強く表明した。そして事実12月4日、ヨーロッパのカトリック諸国に軍隊の派遣と教皇領統治の復旧とを依頼した。その1週間後の12月11日、教皇からの強い拒否を受けたローマの国会議員たちは3頭政治の臨時政府を樹立したが、教皇はこれに対しても12月17日付でその廃絶を宣言し、翌1849年1月1日にも、臨時政府により教皇領で施行される選挙への参加を、破門の罰の下に厳禁した。

しかし、選挙は教皇の抗議を無視して施行され、選ばれた議員たちは、1849年1月21日、123票対134票という微妙な差でローマ教皇の世俗的統治権を否定し、ローマ共和国の設立を決議した。新しい共和国は、マッツィーニ（Giuseppe Mazzini, 1805～72）ら過激派政治運動家たちを指導者に迎えて、同年2月9日、カピトール丘上で正式に設立され、2月11日（日）、聖ペトロ大聖堂で神をたたえる *Te Deum* の賛歌と共にその誕生を荘厳に祝った。³⁷⁾ 教皇はこれに対しても、2月14日、教皇庁職員ならびに教皇庁付各国大使公使の前で抗議を繰り返したが、4月20日には教書 (*allocutio*) “*Quibus quantisque*” を公布して、新しいローマ共和国政府がなした数々の越権行為と不義を激しく非難した。³⁸⁾

一方、1849年3月20日に始まった教皇庁と各国大使とのガエータ会議も

その間に進捗し、その決議に基づいて同年4月25日、ウディノ將軍の率いるフランス軍約9千が、ローマの西方70キロ程の港町チヴィタヴェッキアに上陸した。フランス軍は、ゆっくりとローマへ進軍したが、4月30日、ガリバルディ指揮下のイタリア軍に敗退し、本国からの増援軍を待った。5月に入ると、オーストリア軍も北部からイタリア東海岸諸地方を征服しつつ南下して来た。再シチリア軍とイスパニア軍も、南方からローマに迫った。7月3日、フランス軍はついにローマを占領したが、マッツィーニら過激派自由主義たちもガリバルディも、すでにローマから姿を消していた。ウディノ將軍は、7月14日に聖ペトロ大聖堂でささげられた荘厳な感謝ミサの後、ローマ市民の歡呼にこたえて、次のように話している。

「……私のなした戦争は、ローマ市民に向けられたものではなく、むしろヨーロッパ諸地方からローマに流れ込んで来た一群の外国人に対して向けられたものです。ローマに來た外国人が、この戦争を不可避にしたのです。しかし、私は少なくとも神の御摂理がこの不安と恐れの時を短かくしてくださったことを嬉しく思っています。ローマ市民は、真の宗教の子、真のカトリック者として留まる榮譽をもち、フランス人も、同じ榮譽をもっています。……」³⁹⁾

これらの言葉から察すると、少なくともローマ市民は、まだピウス9世に対する敬慕の念を失っていなかったように思われるが、事実ローマ共和国もマッツィーニらの過激な思想通りには進まず、最後まで教皇統治への傾きを失っていなかったことが、近年のA.M. ギザルベルティ教授の研究により明らかにされている。⁴⁰⁾ 教皇は、フランス軍による市内秩序の回復後、デラ・ジェンガ、ヴァニチェッリ、アルティエーリの3枢機卿をローマに派遣し、同年7月31日から翌1850年4月21日の教皇帰還まで、いわゆる「赤い3頭政治」（枢機卿は赤い服を着用しているゆえ）を施行させた。

ローマ帰還後のピウス9世は、フランス守備軍に守られながらも、すぐれた統治力を発揮し、平穏の中に善政を敷いた。過激派に協力しなかった自由主義者たちは、大赦を受けて採用され、新設された内閣の5名の大臣

もすべて俗人で占められているが、この内閣が全く教皇の統治権と国務聖者長官アントネッリ枢機卿を長とする枢密院との下に置かれていることは、この幾分近代化した国家に、聖職至上主義が強かったことを物語っている。1856年の統計をみても、官吏7,125名のうち聖職者が289名を占め、しかもそれぞれ各方面の要職についている。⁴¹⁾しかし、人民の声は一応上層部にまで達し、牧者の心と責任感をもつピウス9世によって政治に反映させられていたのも、教皇政治に対する人民側からの大きな反対運動は発生していない。但し、イタリア統一へのあこがれが一部の人民の間に強まると、教皇をイタリア統一の邪魔者として殺害し、ボローニャに臨時政府を樹立しようとする秘密組織が、1853年にペトロニを指導者として結成され、教皇の生命をねらうようになっている。そして1855年には、アントネッリ枢機卿暗殺未遂事件も発生している。⁴²⁾

1850年代には、一般に教皇領内の経済状態が活気を呈しており、1823年4月16日に天井の焼け落ちたローマの聖パウロ大聖堂を初めとして、各種の建設がなされている。民衆の長年の希望であった鉄道の敷設も進み、1860年にローマ・フラスカーティ間約25キロと、ローマ・チヴィタヴェッキア間約70キロが開通し、翌1861年には、ボローニャ・アンコーナ間約210キロも完成した。山岳地帯を通るローマ・アンコーナ間約250キロの工事も、またローマ・ボローニャ間直通コースの設計も始められていた。教皇はまた、古代ローマ研究に大きな関心を示し、フォーラム・ロマーヌム、コロセウム、カタコンブ、各地の古い教会堂廃虚等の発掘研究を、積極的に援助している。⁴³⁾

しかし、教皇がこのようにして折角教皇領の発展向上のために成果をあげても、教皇領を守備してくれているフランス共和国のナポレオン3世がサヴォイアとニツァをフランスに譲るなら、ピエモンテ・サルデーニャ王国の中部イタリア諸州併合を認める態度をとったため、教皇領は1860年3月から11月にかけて、急にローマニャ州、マルケ州、ウンブリア州の三つを失って、ローマ周辺のラーツィオ州だけになってしまった。共和主義者

たちに囲まれているナポレオン3世に頼っていても、いかに簡単に裏切られて領地を失うかを痛感させられた教皇は、1961年3月18日付の教書“*Jamdudum cernimus*”を出して、教皇領支配権を放棄しない決意をイタリヤ政府に通告し、これに関する一切の交渉を退けた。⁴⁴⁾ 国土が約4分の1に縮減された教皇領では、税率も必然的に高くなり、教皇支配に不満をいだけ人民も増えたが、ピウス9世の最大の関心は、このころから次第に全世界の司教司祭の方へと移行し始めている。

この時期の教皇を知る上に見逃せないのは、聖母マリアに対する信心である。ピウス9世は、オーストリアに対する独立戦争の件で民衆の不興を買って、失意の状態にあった1848年6月1日、イエズス会神学者パッサリヤ(Carlo Passaglia, 1812~87)ら20名の神学者からなる委員会を設置して、数百年前に特にフランシスコ会神学者とドミニコ会神学者との間で論争され、未解決のまま残されている聖母の無原罪問題についての研究をさせた。そしてこの答申に基づき、1849年2月2日、ガエータから回勅“*Ubi primum*”を全世界の司教に発送して、聖母の無原罪問題に決着をつけるため、教皇がこれを教義として宣言することに対する意見を求めた。600程寄せられた意見書の中には、これは信仰箇条として宣言できないとするパリ大司教シブールらの見解や、このような信仰宣言は今の時代にふさわしくないとする、特にプロテスタント諸国で働いている司教たちの見解もあったが、約90%はこの信仰宣言に賛意を示していた。そこで教皇は、なお周到な考慮をなした後、1854年12月8日、大勅書“*Ineffabilis Deus*”を發布して聖母の無原罪を信仰箇条として宣言し、その記念にローマのスパニーヤ広場(Piazza di Spagna)に美しい大理石の聖母柱像を建立させた。高い柱の上の聖母像が、24年前パリで修道女カトリヌ・ラブールに示された時の姿をしているのも、注目に価する。ピウス9世はパリでの聖母の出現を心から確信し、その私的啓示の言葉に従って信心に励んでいたのではなかろうか。この信仰宣言に先立って、1846年9月にフランスのグレンノーブルに近いラ・サレットで、二人の子どもメラニー(Melanie

Mathieu, 1831~1904) と マクシマン (Maximin Giraud, 1835~75) とに語ったという聖母の出現とメッセージが、1851年グレンノーブル司教ドゥ・ブルイヤールにより調査・公認された後、間もなくこの地に巡礼者のための聖堂が建立されていることも、注目を引く。教皇の運命や、イタリアならびにフランスなどの状況について警告している、このいわゆる聖母のメッセージをピウス9世も耳にしていたと思われるからである。⁴⁵⁾ 1858年2月11日から7月16日までフランス西南部の片田舎ルルドでも、14歳の少女ベルナデット (Bernadette Soubirous, 1844~79) に18回にわたって聖母の出現があり、特に3月25日の出現の時に出現者が自分を「無原罪懐妊」(少女はルルドの方言で “Que soy era Immaculada Councepciou” と証言する) と名乗ったことは、一層多くの人を驚かせた。⁴⁶⁾ これは、1854年12月8日のピウス9世による信仰宣言を確証するような啓示であり、しかもそのルルドの聖母出現箇所でも相次いで起る数多くの奇跡的治癒が、この確証をいやが上にも強固なものとしたからである。多くの神学校ではこのころから、1846年11月9日付の回勅 “Qui pluribus” に述べられているローマ教皇の不可謬性についての言葉を引用しつつ、教皇の背後には神の不思議な導きが働いているから教皇の言うことには誤りがない、などという教えが説かれるようになった。

1852年の春、教皇は全世界のすべての司教を、同年6月8日の聖霊降臨祭にローマに集まるよう招待し、またできるだけ多くの司祭がこの日ローマで祝われる日本26殉教者の列聖式に参列するようと呼びかけた。この年の1月12日に横浜の聖心天主堂が献堂された時、非常に多くの日本人が参観に来て、中には日を決めて教理研究に通う者さえあったこと、ならびに日本教区長ジラルド神父が横浜から連れて来た1名の日本人青年が、ローマで教皇に拝謁し、4月19日の聖土曜日に教皇代理の枢機卿から受洗したこと、⁴⁷⁾ などから、思い付いた企画であろう。フランス皇帝ナポレオン3世とイタリア国王ヴィットリオ・エンマヌエーレ2世とが、その国内聖職者のローマ行きを禁止し妨げたために、教皇の望み通りには行かなかった

が、それでも枢機卿・総大司教・司教を合せて323名と司祭約4千名が、この年の聖霊降臨祭にローマに参集し、日本26殉教者の列聖を盛大に祝った。⁴⁵⁾

一体、教皇はなぜこの時期に全世界の司教をローマに招き、しかも日本26殉教者の列聖式を自らの発意で挙行了たのであろうか。察するに、教皇領を守っているフランス軍の皇帝ナポレオン3世が、イタリア政府と手を結んでいつまた教皇領を削減あるいは廃止するかわからない、という危機感が深まり、教皇は、一方ではこういう近代人の精神に抵抗するため殉教をもいとわぬ覚悟を固めると共に、他方では教皇と全世界のカトリック者との一致を一層緊密にし、教皇領略奪という犯罪や神から教皇に与えられている権威の無視に対して、国際的規模で戦う道を模索していたのではなかろうか。教皇権威確立のための思想的戦いは、**Extra Ecclesiam nulla salus**（教会の外に救いはない）の原則を新たに強調した1863年8月10日付回勅“**Quanto conficiamur moerore**”や、教皇の権威を無視するすべての近代思想を排斥した1864年12月8日付回勅“**Quanta cura**”，ならびにそれに付加されている「現代誤謬表」等により続けられているが、この現代誤謬表第80番に、「ローマ教皇は進歩・自由主義・現代文明と和解妥協できるし、またそうしなければならない」という意見まで誤りとして退けられているのは、このころのピウス9世を悩ましていた危機感の、深さと異常さを感じさせる。このような意見まで退けることは、進歩的自由主義者と協力していた1846.7年ごろの教皇領統治ばかりでなく、1850年代の教皇領統治をも誤りとすることを意味し、さらには現代文明の流れ全体に心を閉ざし、これと戦う絶望的生き方に落ちて行くことにもなりかねないからである。

ところで、教皇領が大きく削減されたというだけで、信心深いピウス9世が、急にそれまでの自分の生き方を誤りとし、現代文明をこれ程まで悲観視することが果して可能であろうか。ほかにも何かの要因が働いて、教皇を極度の悲観主義へと追い込んだのではなかろうか。そう思って調べて

みると、ピウス9世の聖母信心が浮かび上ってくる。聖母信心は、ピウス9世の心を幼少のころから養い支えて来た信心であり、青年期に絶望的苦悩から立ち上った時の一つの杖でもあった。教皇在位の中ごろからは、聖母無原罪の祝日である12月8日が、まるでピウス9世統治の主題歌のような役を演じているのも、教皇が聖母の導きに特別に従って生きようと努めていたことの一つの証拠であろう。聖母信心こそ、ピウス9世の弱い心を絶えず励まし導いた背骨であった、と言っても過言ではない。しかし、長所はしばしば短所になり易く、心があまりにも聖母信心に傾倒するところから、危険も生じ得ると思う。ピウス9世は、教皇領大幅削減の苦杯を味わった1860年ごろに、ことによるとラ・サレットでメラニーに与えられた秘密のメッセージに、少しとらわれ過ぎたのではなからうか。この啓示は、1858年に公にしてよいと前置きして、人々の罪の増大を恐しく悲観的に描き、悪書が数多く出て来ること、神がかつてないような方法で人々を罰しようとしていること、ならびに悪人が教皇の生命をねらい、教皇は非常に苦しむことになることを予告しており、教皇を1859年以降ローマから去らせないように、二心あるナポレオンを教皇に信用させないように、などの具体的勧めも与えて、これらの言葉が一つ一つ実現するのを体験した教皇の心を、その中に隠し持つ固有の悲観主義へと籠絡したようにも考えられるからである。ピウス9世のように幼少のころから聖母信心に励んでいたアルスの主任司祭ジャン・ヴィアンネー(Jean B. M. Vianney, 1786~1859)も、初めはこれらのメッセージを喜んで信じたが、1850年9月に啓示を受けたマクシマンに会った時から自分の死の少し前までは、その信びよう性を疑っていたと言われる。⁴⁹⁾しかし、人の心に対するセンスには恵まれていても、啓示を受けた当人に直接に会う機会に恵まれなかったピウス9世は、これらのメッセージをそこに秘められている極度の悲観主義と共にそのまま信じてしまったのではなからうか。

ピウス9世は、すでに1849年2月2日付回勅“Ubi primum”を全世界の司教に発送した時、危険な時代思潮を克服するために公会議を開催し、教

皇の靈的権力を強化したい意向をもっていたようだが、その後フランスのデュパンルー司教 (F. A. P. Dupanloup, 1802~78) や 1863年にローマを訪れたマニング神父 (H. E. Manning, 1808~92, 1865年にロンドン大司教) からも公会議開催の勧めを受けると、ゆっくりと決心を固めた。⁵⁰⁾ 1864年12月6日、聖母無原罪の信仰宣言10周年記念の2日前、教皇はその時ローマ教皇庁に勤務していた21名の枢機卿に向い、

「すでに久しい以前から、全世界の教会の利益に関連する一つの考えが自分の心に浮んでいるが、それは公会議を開催して、キリスト者の群の非常の必要性のため非常の手段を提供することである。そこで枢機卿各人が自分でその企画について研究し、主において適当と判断したことを個人別に書面で具申するように。但し、すべてを絶対秘密のうちにすように」⁵¹⁾

と命じた。21名の枢機卿のうち、15名は40日以内にその答申を提出しているが、残りの6名は非常に遅く、1865年10月から1867年1月の間に提出している。一番詳細な答申をなしたのは、ミュンヘンのフォン・ライザッハ枢機卿である。その意見は、

1. 権威を無視する教説や世界観を退けて、教会と教皇庁との権威を確立するため
2. 近代社会に適合するように教会法を改革し、教会は不動化して近代社会にはあわないという非難にこたえるため
3. 自由主義的理念によって教会から離れている諸国家の中においても、社会秩序のキリスト教化に影響を及ぼすことができるため

の3点から、公会議の必要性を力説していると言ってよい。その他の枢機卿たちもそれぞれ公会議の必要性を説いているが、ただ2名 (Roberti と Pentini) だけは、現状勢下で公会議を開催することの危険性や無効果に終る恐れのあることを強調し、1名 (Villocourt) は公会議開催の延期を建言している。公会議で取りあげるべき議題に関しても、数多くの提案がなされている。ここでも2名 (Ugolini と Asquini) だけが、他の多くの議題に付加して、信仰と道徳の教えについてのローマ教皇の不可謬性を

挙げている。⁵²⁾

しかし、そうこうしている間にも、教皇はすでに公会議開催へと動き出し、秘密のうちに5名の枢機卿を委員とする公会議準備委員会を設置した。委員会は1865年3月9日にその第1回会議を開いたが、この会議では、すでに300年という例外的に長い期間公会議が開かれておらず、信仰を乱し、社会秩序を転覆させる危険思想もはびこって来ているので、これらに対する治療手段として、また規律再建のためにも、公会議は必要である、などの論議がなされている。⁵³⁾ 3月12日にこの委員会報告を受けた教皇は、準備委員会から独立して自分でも別に準備を進めようとしているかのように、すぐに自分の欲する司教たちと直接に連絡をとることを要求し、ヨーロッパ各国の司教のうち36名に秘密に書簡を送って、公会議で取り上げるべき主な議題についての意見を求めた。この司教たちの意見書の中にも、他の多くの議題と共に、教皇の権威と不可謬性をあげているものが幾つか見受けられる。⁵⁴⁾

こうして秘密裡に公会議開催準備が進みつつあった同じ1865年の春、キリシタン禁制の続く日本で、今なお数多くの信徒が信仰を守っているとの知らせがヨーロッパに達し、3年前に教皇の発意で日本26聖人が列聖されたばかりだっただけに、ここでも教皇の背後に働く神の摂理の神秘に、驚きを感じた人が少なくなかった。それで1866年12月8日、教皇が再び全世界の司教に書簡を送り、1867年6月29日にローマで挙行する聖ペトロ聖パウロ殉教1800年記念祭に、できるだけ多く参加するよう呼びかけると、一部の人々は、今度は教皇の不可謬性が信仰箇条として宣告されるであろうと考えた程であった。

いよいよ待望の記念祭が近づくと、またもフランスとイタリアから邪魔が入り、フランス軍が教皇領から撤退するとか、ガリヴァルディがローマを襲撃するであろうなどと言って、脅された。しかしこの大きな危険にもかかわらず、30カ国から500名以上の司教が、約2,000名の司祭ならびに13,000名の信徒と共にローマに参集した。⁵⁵⁾ ピウス9世は、ガリヴァ

ルディによるローマ侵略の気配が感じられると、6月29日に公布を予定していた教書を3日早い6月26日の臨時枢機卿会に発表した。この教書は、当時のピウス9世の心境をよく表わしていると思われるので、2千語を越える長いものであるが簡単に紹介してみよう。⁵⁶⁾

教書には、まずローマ教皇を中心とする全カトリック教会の一致と、神に対する殉教者的忠誠心が称揚され、激動の時代には信仰者の強固な一致団結の必要であることが説かれている。「神を離れ、教会の権威を軽視したのでは、人間は荒れ狂う嵐と不一致の中で惨めに奔弄され、自分の幸福を罪によって追求する」だけだからである。次いで教皇は、信仰者の一致を固めるため、主からローマ教皇に与えられた使命と権力の重要性を強調し、主がペトロに言われた「わたしの羊の世話をしなさい」（ヨハネ 21, 17）、「わたしは、お前のために信仰がなくならないように祈った。だからお前は、立ち直ったら兄弟たちを力づけてやりなさい」（ルカ 22, 32）の言葉や、「……だからペトロにおいてすべての人の剛毅は守られ、神の恵みの助けは、キリストのペトロに与えた堅固さが、ペトロを通して他の使徒たちにも与えられるように働くのだ」という教皇レオ1世の言葉を引用している。また、

「私は、ずっと以前から、正義と宗教の擁護のため、悪賢くて攻撃的な敵に対する戦列に立っています。……私は教会の主張、自由、権利のため最高の役職者として戦いつつ、この日まで全能の神の助けにより恐ろしい危険から守られて来ました。しかし、今なお逆風と荒波に急に襲われたり動揺したりしています。現存する主キリストの助けがありますので、難破を恐れてはいませんが、でもあまりにも多くの新しい教説の出現と、教会と使徒聖座に対するあまりにも不正な犯罪のために、全く深甚の苦悩を味わっています。これらの教説や犯罪は、すでに他の機会に断罪し排斥しましたが、今あらためて公然と、私の聖なる職権により排斥し罪に定めます」⁵⁷⁾

と部分的には1866年10月29日の枢機卿会議での訓示を新たに繰り返している。そして最後に、旧約の神の民の歴史や主キリストの言葉を思い出させ、神におけるすべての人の一致を強調しながら、「多くの意見を集め、

研究を結合させて、教会を抑圧しているあまりにも多くの害悪に対する必要且つ効果的良薬を神の助けによって適用するため」公会議を招集することを予告し、この公会議によってカトリックの真理の光が輝き、教会が難攻不落の城のように敵の攻撃を粉碎して、キリストの王国を地上に広めることになるよう強く希望している。

ピウス9世が、この教書の中で、教会の権利や教皇の権威を岩のように不動なものとして理解し、激動する近代世界を過ぎ去る悪の嵐のように見なして、ただこの荒れ狂う嵐に抵抗することだけを念頭に置いているのは、注目に値する。このような観点から一方的に準備され運営された第1ヴァチカン公会議が、結局ローマ教皇の不可謬性を中心課題にして展開し、近代世界のキリスト教化や教会の近代化のためにはむしろマイナスに作用してしまったのも、当然であろう。

心配されたガリヴァルディによる侵攻は、この時にはまだ行われず、聖ペトロ聖パウロの殉教1800年記念祭は盛大に挙行されたが、その2日後の7月1日、参集した司教たちは、公会議の開催を喜び祝贺する連名の書簡を教皇に提出した。公会議開催の準備は、この後急速に進められ、1年後の1868年6月29日には、公会議招集の大勅書“*Aeterni Patris*”が公布されて、開会日が1869年12月8日と定められた。その間、1867年秋に教皇領に侵攻したガリヴァルディの軍隊は、11月3日、ローマの北約30キロのメンターナでフランス軍に大敗し、フランス軍の守備している間は、ローマの安全が一応保証された。

第1ヴァチカン公会議は、このような状況の中に予定通り1869年12月8日に開会され、普仏戦争勃発でフランス軍の撤退が通告され、一部の司教たちが帰国し始めた1870年7月18日まで続くが、その経過についてはすでに各種の著作を通じてわが国にも知られている。しかし、その後教皇領を完全に奪われたピウス9世が、イタリア政府からのどんなに妥協的な申し出に対しても、あくまでも拒否と抵抗の姿勢を崩さなかったことを思うと、ピウス9世は、教皇領喪失を、時期がくればまた元通りに回復され

る一時的受難として考えていたように思われる。しかし、その後の歴史はこの予測通りには進展せず、教会はピウス 9 世によって一層遅らせられた教会近代化のために、大きな犠牲と努力を払わなければならなかったと言ってよい。もしこのような評価が正鵠を得ているなら、現代に生きるカトリック者も、もう一度ピウス 9 世の歩んだ道に立ち戻ってその長所と短所をゆっくりと反省し、二度と同じ失敗を繰り返さないよう心掛ける必要があるのではなからうか。

結 語

教皇ピウス 9 世の生い立ちから公会議招集までの歩みを通覧して、一貫して続いていると思われるのは、いつも自分を敬愛し支持してくれる人々のために、その人々との心理的一体感に支えられて生きようとしていたことである。幼少年期に自分の家族や故郷の人々から愛され、その人々の気に入るようにと努めたように、長じてからも、あるいは教師や学友に、あるいは自分の世話する育児院の職員や子どもたちに、あるいは独立運動をなす南米の信徒たちに、あるいは自分に託されたイタリアの教区民にと、常に自分を支持してくれる人々のために骨身を惜しまず仕えており、最後には全世界の司教司祭たちを、自分の特別な支持層と見ていたように思われる。

このような生き方の人には、もし自分の仕えようとしている相手が、いわば母親に対する幼児のように自分を愛し、自分に頼ろうと従おうとしている時には、驚く程大胆に振舞い、不屈の忍耐力を発揮して献身的に働くが、相手が自分のと異なる理念に生きがいを見出して独立しようとし始めると、急に意欲を失い、深刻に苦しみ始めるのではなからうか。そのような相手は、その新しい理念のゆえに自分の愛や権威を無視し、自分のなすどんな奉仕をもしばしばマイナスに評価するからである。もしこのような生き方に傾いている心を「母性的」と称することが許されるなら、ピウス 9 世の人生には、すでに司祭生活の初めごろから、この「母性的」特性が濃厚に

現われていると言ってよい。

多くの場合、この「母性的」心は、保守反動政治に失望して教会からも離れていた信徒の心を動かし、教会へ立ち帰らせることに成功した。不幸の責任の大半を為政者の悪政に帰し、苦しむ子らの側に立つ慈母の役を演じたからであろう。しかし、この「母性的」心の持主自身が教皇庁の最高の地位に就き、自ら政治をなした時には、結局失敗してしまった。なぜであろうか。政治の最高責任者として、まず社会秩序を危険にする思想や活動に対しては、相手に恐怖を感じさせる程断乎たる「父性的」精神をもって臨み、それらを排除または統禦しなければならないのに、持前の「母性的」同情心を優先させて、危険な政府犯にまでも極度に寛大な大赦命を出し、しかもこの「母性的」寛容の政治姿勢に片寄り続けてしまったからである。被支配層の中に政治に対する不満が高まって、為政者の権威が無視され勝ちな非常事態の時には、「母性的」為政者が政治を担当して事態の収拾に努めることは、確かに必要であり、民衆の心理的古傷をいやす上にも効果的である。しかし、この非常措置と平行して、過激な動向をおさえ、新しい政治を守り育てるための強力な「父性的」施策も必要であったのに、この第2点に十分留意しなかったことが、過激な民衆指導者たちに乗ずる隙を与えたのではなかろうか。

こうして始まった政治の混乱から、諸外国軍介入のお蔭でようやく脱出しても、ピウス9世は、悪に対して真っ向から立ち向って行く「父性的」精神で、危険な思想や社会運動を内面から浄化し超克しようとはしていない。すなわち毒をもって毒を制するような仕方で、危険な思想や運動を浄化制禦するために、当時の新しいカトリック思想家たちを支援する道も可能であったのに、1848年の失敗をあまりにも深刻に受け止めたピウス9世は、今度はその傷ついた「母性的」心の弱点を表面に出したようで、近代思想すべてを危険視したり、キリストからペトロを通して受け継いでいるローマ教皇の宗教的権威を強調したりして、近代社会の潮流に背を向ける方向へと進んでいる。イタリア統一国民運動に対して、ローマ教皇の世俗

の支配権保持に異常な程強い執着を見せたのも、教皇領を喪失すると、岩屋のような冷たい法的権威と権利の中に閉じ籠って一切の交渉を拒否したのも、愛を裏切られた同じ「母性的」心のあらわれではなからうか。筆者は、ピウス9世がこのようにしてあくまでも「母性的」心のみを優先させ、その弱点に気付かず、その不足面を他の要素で補おうとしなかったところに、ついには近代世界の潮流全体に心を閉ざしてしまい、第1の一番大きな理由があるように思う。ピウス9世は、他の多くの点では全く優れた素質の持主であり、信心深い努力家でもあっただけに、これは本当に残念なことである。

ところで、もしもピウス9世が1860年ごろからでも全世界の司教たちの意見を平等に尊重し、その期待に応えて生きることに全力を投入していたならば、それまでに示したすぐれた順応力や超越心から察して、教皇は近代思想をそれ程恐れずに、また教皇の現世的支配権にもそれ程こだわらずに、ローマ教皇の霊的権力をもっと割り切れた形で国際的に確立し、後継者に難しい「ローマ問題」を残すこともなかったと思われるが、教皇はなぜそれ程までに近代思想を危険視し、教皇領支配に執着し、公会議をも秘密主義と議題提出権独占により、自分の欲する方向へと誘導したのであろうか。公会議開催に向けて動き始めた時、ピウス9世はすでに70歳を越えていて、思考に柔軟性を失って来ていたことも、その一つの理由であろう。しかし、同時にラ・サレットのあの私的啓示に少しとらわれすぎたことも、もう一つの理由なのではなからうか。

確かに、この啓示に予告された幾つかの具体的事柄は、次々と実現した。しかし、だからと言って、啓示のすべてが正しいことにはならない。少し極端に言うなら、悪霊が光の天使を装って、将来自分のなすことを予告した可能性も否定できないであろうし、またたとい実際に善の霊が人の心に作用したとしても、その啓示を受容し言葉に表現する段階で、その人のメンタリティやその他の不完全さが、無意識の中に啓示の一部を歪めている可能性も否定できないであろう。新約の4福音書を相互に比較する

と、同じ時代に同じように主の言行を見聞しても、人によりその理解や表現の仕方が大きく異なっていて、福音記者の無意識的な性向も如実に表われているのに驚くが、同じBC 8世紀に神の民に対する警告を受けたアモス、ホセア、第1イザヤの3預言者の言葉を比べてみても、同様の印象を否定できない。近代になされた私的啓示の場合も、それらは啓示者とそれを受けた人との合作であり、たとえ啓示者側に誤りはないとしても、それを受けた人間側から無意識のうちに不完全や誤りが混入し得る性質のものではなからうか。

このように考える時、たといラ・サレットの啓示が聖母からのものであったとしても、それを受けた人間の側からそこに近代世界に対する非常に悲観的な評価が混入してしまい、これが聖母信心に熱心で1848年の苦い革命体験をもつピウス9世を、近代思想に対する徹底的抵抗へと導いた可能性も大きいように思われる。しかし、神は悪から善を導き出すこともできる方である。ピウス9世が祈りつつ選んだ抵抗と受難の道は、全世界の司教団に対するローマ教皇の指導権を強化して、全カトリック界の一致団結を容易にしたばかりでなく、教会内の進歩的知識人をも浄化し強化して、その後の歴代教皇の時代に、教会の近代化をゆっくりと着実に進めるのに役立っているのではなからうか。ピウス9世の歩んだ道に対するあまりにも一方的で皮相な評価は、慎しみたい。

注

1. 例えば、フーベルト・イエディン著山崎澄男・梅津尚志共訳『キリスト教会公会議史』、エンデルレ書店1967年、p.207～217；南山大学監修『歴史に輝く教会』（公会議解説叢書6）、中央出版社1969年、p.259～278；K.v.アーレティン著沢田昭夫訳『カトリシズム、教皇と近代世界』、平凡社1973年、p.91～103, 111～116 参照。
2. 『ヨーロッパ・キリスト教史Ⅴ』、中央出版社1952年、p.331～355所収。
3. “Handbuch der Kirchengeschichte”, herausgegeben von H. Jedin, VI (Herder 1971) p.776.

4. Ch. Sylvain, "Histoire de Pie IX le Grand et de Son Pontificat", 2 vol. (Paris 1878), II. p.137.
5. Sylvain, op. cit. I, p.3.
6. G. S. Pelczar, "Pio IX e il Suo Pontificato", 3 vol. (Torino 1909~10), I. p.16.
7. Sylvain, op. cit. I. p. 5. なおピウス9世の誕生と幼年期については, Pelczar, op. cit, I. p.5ff も参照。
8. "Voilà un jeune homme qui ira loin, pour peu que les circonstances le favorissent" — Pougeois, "Histoire de Pie IX, Son Pontificat et Son Siècle", I, p.6 : in S.Schmidlin, "Papstgeschichte der Neuesten Zeit", 3 vol. (München 1933~36) II. p.7.
9. Pelczar, op. cit. I. p.26.
10. Sylvain, op. cit. I. p.10; Pelczar, op. cit. I. p.27.
11. Pelczar, op. cit. I. p.31~36 所収。
12. "Mastai è un giovane di largo sapere e di rara virtù, nel suo petto batte un cuore da Papa". — Pelczar, op. cit. I. p.36.
13. "di quel figlio, il quale conforme sa tutta Roma, la patria e la famiglia, sopravvive per solo tratto della Divina Provvidenza ... di quel figlio infine che tanti anni or sono per la sua debole complessione fu legalmente esentato dalla coscrizione militare, ed è tutto dire. E come no? Gracile egli per natura, soggetto ad alterarsi ad ogni urto nell'applicare, nel cibarsi anche sempre misurato, nei patemi d'animo" — Pelczar, op. cit. I. p.59.
14. Sylvain, op. cit. I. p.21ff; Pelczar, op. cit. I. p.59ff.
15. Sylvain, op. cit. I. p.27ff; Pelczar, op. cit. I. p.68ff.
16. Sylvain, op. cit. I. p.36ff; Pelczar, op. cit. I. p.81f. 森田鉄郎編『イタリア史』, 山川出版社(世界各国史15)1976年, p.284~285; 森田鉄郎・重岡保郎共著『イタリア現代史』, 山川出版社 1977年, p.87~88 参照。
17. "Mio signore, tu non conosci bene nè il tuo nè il mio mestiere; quando il lupo vuole rapire una pecora, non ne dà primo avviso al pastore" — Pougeois, op. cit. I. p.57f: in Schmidlin, op. cit. II. p.9.
18. Sylvain, op. cit. I. p.40f; Pelczar, op. cit. I. p.35.
19. H. Kühner, "Lexikon der Päpste" (Zürich 1958), p.172.
20. M. Marocco, "Della Vita, del Pontificato e del Regno di Pio

- IX", 7vol. (2. ed., Torino 1863~64), I. p.189ff.
21. Sylvain, op. cit. I. p.49.
 22. Marocco, op. cit. I. p.209ff; Pelczar, op. cit. I. p.88f; Sylvain, op. cit. I. p.47ff.
 23. "Evviva il Papa, ecco il Papa della colomba". — Sylvain, op. cit. I. p.56f; Pelczar, op. cit. I. p.104f.
 24. Pelczar, op. cit. I. p.108ff.
 25. Marocco, op. cit. II. p.3ff; Sylvain, op. cit. I. p.73ff; Pelczar, op. cit. I. p.282ff; E. E. Y. Hales, "Papst Pius IX., Politik und Religion" (Graz 1957), p.75ff.
 26. "Acta Pii IX Pontificis Maximi" 7vol. (Roma 1854~78), I. p.4~24.
 27. Marocco, op. cit. II. p.86ff.
 28. Jedin, op. cit. VI. p.480.
 29. Jedin, ibid. p.482.
 30. Hales, op. cit. p.78; Sylvain op. cit. I. p.86ff; Pelczar, op. cit. I. p.293f.
 31. Marocco, op. cit. II. p.238ff; III. p.148ff; A. J. Nürnberger, "Papsttum und Kirchenstaat (1800~70)", 3 vol. (Mainz 1897-1900), I. p.244; II. p.9f; Sylvain, op. cit. I. p.136ff; Pelczar, op. cit. I. p.306ff.
 32. Marocco, op. cit. V. p.25f; Nürnberger, op. cit. II. p.41f; Sylvain, op. cit. I. p.146f.
 33. "Gott gewährt niemals Amnestie. ... Die Barmherzigkeit Gottes wird nur auf dem Wege der Vergebung erzeugt, und Reue ist das notwendige Erfordernis der Vergebung." — "Aus Metternichs nachgelassenen Papieren", Bd. 7 (Wien 1883), p.250f; in Hales, op. cit. p.76.
 34. Hales, op. cit. p.99f.
 35. "Acta Pii IX Pontificis Maximi", I, p.92~98; Jedin, op. cit. VI. p.483.
 36. Jedin, ibid. p.483; Hales, op. cit. p.107; Nürnberger, op. cit. II. 125ff.
 37. Marocco, op. cit. VII. p.31ff; Sylvain, op. cit. I. p.229ff; Pelczar, op. cit. I. p.422ff; Nürnberger, op. cit. II. p.260ff; Jedin, op. cit. VI. p.486.

38. “Acta Pii IX Pontificis Maximi”, I. p.167~194; Schmidlin, op. cit. II. p.36; Hales, op. cit. p.146f. — この時教皇の非難した見解は、1864年12月8日公布の「現代誤謬表」第76番に、「使徒座が持っている世俗権力の廃止は、教会の自由と繁栄に大いに役立つであろう」という形に要約されている。
39. Hales, op. cit. p.167f.
40. Jedin, op.cit. VI. p.486.
41. Hales, op. cit. p.218.
42. Nürnberger, op. cit. III. p.15ff.
43. Hales, op. cit. p.230f.
44. Hales, ibid. p.363f.
45. H. Graef, “Mary, a History of Doctrine and Devotion”, vol. 2 (London 1965), p.99ff.
46. R. Lauretin, “Bernadette of Lourdes” (London 1979, フランス語原文 Paris 1978), p.81ff.
47. 浦川和二郎著『切支丹の復活』, 1927年, p.197~201 参照。
48. Hales, op. cit. p.392.
49. Graef, op. cit. p.102.
50. Schmidlin, op. cit. II. p.257.
51. J. D. Mansi, “Sacrorum Conciliorum Nova et Amplissima Collectio”, vol. 49, p.8~9.
52. Mansi, ibid. p.9~94.
53. Mansi, ibid. p.97~104.
54. Mansi, ibid. p.105~173. —但し p.108 のリストには、ベルギーと英国の司教が各1名欠落して、34名しか載っていない。Th. Granderath, “Geschichte des Vatikanischen Konzils”, 3 vol. (Freiburg i. Br. 1905~1906), I. p.47ff.
55. Hales, op. cit. p.393.
56. Mansi, op. cit. p.243~248.
57. Mansi, ibid. p.246.

The Formation and Life of Pope Pius IX until the Convocation of the First Vatican Council

Gen AOYAMA

It is well known, that Pius IX (1846-78) at first had a zeal for liberal political movements of his times and established a parliamentary government in the Papal territories, but later, when a revolution broke out in 1848, he became a persistent fighter against all sorts of modern thought which do not recognize the Papal authority from Christ. Many investigations have been made concerning how this change happened and evolved, and how the First Vatican Council was carried out. But when it comes to researching the reasons on the side of Pope Pius IX, why he hardened himself so radically against modern thought, there have been almost no studies at all. Perhaps this is because the Pope gave merely juridical and theoretical reasons for his acts, but related almost nothing about his own personal and psychological reasons for this change.

The author took a special interest in this point when he attended in 1961 the lectures of Prof. Jos. Grisar SI at the Gregorian University, Rome. Prof. Grisar was at that time the archivist at the Vatican Archives and was framing the investigation for the beatification of Pope Pius IX. The author gathered the necessary materials in Rome, once visited Senigallia, Pius IX's hometown, and wrote a report in Italian under the title: "Un aspetto della formazione di Pio IX." The present study has the same scope, i. e., to investigate the personal and psychological reasons for the historical change and for the closed attitude of Pius IX against the modern world.

Pius IX showed from the beginning of his priesthood a strong

inclination to care for people in his charge like a mother for her children. If the people are gentle and obedient to him, he performs with wonderful boldness and works selfsacrificingly for his people. But if the people do not respect his authority and wish to be independent in order to realize their own new ideas, he would have such bitter grief that he would regard all these ideas with hostility and would cling to his authority. The author describes how this character is formed in his childhood and penetrates his whole life, and concludes that this is the first and the greatest reason for that historical change.

The author suggests however, that there can also be a second and supporting reason, namely the pessimism of the so-called Marian Message at La Salette in 1846 against the modern world. But God can make good from evil. The way of resistance and passion which Pius IX chose in prayer, was perhaps a better way in God's eye to realize the *aggiornamento* of the Roman Catholic Church. So we must be cautious not to judge the choice of Pius IX superficially from external reasons.